ワカサギ

Hypomesus transpacificus nipponensis

キュウリウオ科

ワカサギ

名前の由来

ワカは幼い（清新）、サギは細魚（小魚）の意で、「清新な小魚」の意だとする説がある。学名の「nipponensis」は、「日本産の」という意味。別名：チカ（北海道・東北、混称）漢字名：公魚

特定種

該当なし

形態的特徴

全長14cm。腹ビレの起点は、背ビレ起点の真下ないしやや前に位置する。口は小さい。

脂ビレをもつ。（脂ビレ：背ビレと尾ビレの間のヒレで、サケ科、キュウリウオ科《アユの仲間も含む》、熱帯魚のカラシン亜目にのみ見られる。条《スジ》がない）

類似種と見分け方

イシカリワカサギ、キュウリウオ、シシャモ、チカ。

チカの腹ビレ起点は、背ビレ起点の真下よりやや後に位置するが、ワカサギやイシカリワカサギは真下ないしやや前に位置する。

また、チカは淡水域には入らないという。キュウリウオの口の切れ目は「眼の後端」に達し、シシャモは「瞳の後端」、ワカサギは「眼の中央」までである。

イシカリワカサギの吻（口先:正確には眼より前方の部分）は両眼の間隔より短いのに対し、ワカサギでは長い。

シシャモの尻ビレの外縁は丸いのに対し、他種は直線的。

イシカリワカサギの脂ビレ（背ビレと尾ビレの間のヒレ）は大きく基底長が眼の直径より長いのに対し、ワカサギの脂ビレは小さく基底長は眼の直径より短い。

ワカサギ

キュウリウオ

生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
産卵期〈河川〉												
ふ化・降海期												
成長期〈海・沿岸〉（または湖沼）												
遡上・産卵〈河川〉							多くは産卵後死ぬ。生存するものも					

一　生

産卵期は北ほど遅く、北海道で４～６月。ふ化後、仔魚はすぐに海や湖に流れ下り、１ヶ月ほどは岸のごく近くにいるが、その後沿岸一体に広がる。海で越冬して春に遡上産卵するタイプ（日本海側）と秋遡上して湖で越冬、春に産卵するタイプ（オホーツク海側）がある。十勝川の十勝河口橋下流部では、冬に穴釣りされ、利別川で冬に捕獲された例もある。また糠平湖などでの冬の穴釣りも知られている。降海性のものは秋に川へ入って越冬し、上流の湖のものは湖で越冬して春遡上あるいは湖岸で産卵する（妹尾優二）。１年で６～11cmに成長して成熟する。（石狩川では満２年で成熟する例もある）産卵後多くは死ぬが、２～３年生き残って産卵を繰り返すものもいる。

生息環境・分布

海の内湾、湖沼、人工湖とこれらに注ぐ河川の下流域に生息する。水温・塩分濃度・栄養塩類などの変化に強い適応性を示し、水質悪化した湖でも繁殖を続ける例があるという。

分布：アリューシャン列島から北アメリカのカリフォルニア州にまで分布。

国内では、北海道全域や、利根川・島根県以北の本州に自然分布。最近は各地に移殖されている。

十勝地方では、沿岸海域とそれに注ぐ河川の下流域。上流にある湖やダム湖とその流入河川にも生息している。（ダム湖などは移殖魚が多い）

食　性

浮遊動物（プランクトン動物）。稚魚期には藻類やワムシなどを食べるという。

繁殖生態

産卵期は４～６月（北海道）。産卵場は遡上河川の浅瀬の砂礫底や湖の岸ないし砂礫底。昼間河口に集まった産卵群は、日没後遡上を開始する。（石狩川では30km以上遡上するという）湖に注ぐ小河川では夜明けに湖に戻り日没後再び遡上して産卵を繰り返すという。十勝川下流部では秋に川へのぼって越冬し、春に産卵場へ向かうと思われる。卵は砂礫底に多く産み付けられる。卵は産卵場の砂礫に付着したり礫のすき間に入ったりし、流下した卵は水草や河岸に露出する木の根（特に毛根）などに付着するものが多い。また、河床凸部の下流側で砂が堆積するような所にも、砂に付着した卵が堆積する。（妹尾）卵は直径約１㎜。体内卵数は1,000～２万粒。11日（水温16℃）ないし38日（７℃）ほどでふ化するという。多くは産卵後死亡するが、２～３年生き残って産卵を繰り返すものもいる。

他生物との関わり

卵は底の砂の他、水生植物の茎などにも産み付けられる。

興味深い話

■氷上の穴釣りは、冬の楽しみの一つである。

■おいしい魚で、特に天ぷらやフライにするとよい。

■容易に陸封されるので現在では鹿児島県池田湖以北の多くの湖・ため池・人工湖に移入され増殖している。石狩川には元もと生息していたが、網走湖から移入がおこなわれ、移入種が多勢を占めるようになったが、その生態には原産地と異なるところが見られ、在来型・移入型の間の関係など、興味深い研究対象とされている。

■十勝地方のアイヌ語名は不明。白糠のアイヌ語では、チカ、美幌ではスアッチェプと呼ばれる。

配慮事項

降海・降湖、遡上をするので川－海（湖）の行き来ができることが必要。遊泳力やジャンプ力は比較的弱い（妹尾）。水温・塩分濃度・栄養塩類などの変化に強い適応性を示すという。とは言え、諏訪湖の汚濁はその限度を超えたようで、生息数の激減が見られるという。

移入が盛んにおこなわれる魚である。石狩川においては網走川からの移植が進んだ結果、在来の群れ（脊椎骨数が56～57個）がかなり減少した（駆逐された）と見られている。

参考文献

「北海道の淡水魚」稗田一俊、北海道新聞社　1984

「図説 魚と貝の大辞典」望月賢二 監修、魚類文化研究会 編、柏書房　1997

「山渓カラー名鑑 日本の淡水魚」川那部浩哉・水野信彦 編・監修、山と渓谷社　1989

「川づくりのための魚類ガイド」北海道河川環境研究会、(財)北海道建設技術センター、2001

「原色日本淡水魚類図鑑」宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦、保育社、1963（1976全改訂新版）

「検索入門 川と湖の魚②」川那部浩哉・水野信彦、保育社、1990

「日本産 魚類検索－全種の同定－」中坊徹次 編、東海大学出版会　1993

「知里真志保著作集 別巻Ⅰ 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」知里真志保、平凡社、1976

★ 妹尾優二：(株)エコテック、流域生態研究所